

Henry Maguire ed.,

Byzantine Court Culture

from 829 to 1204

ヘンリー・マグアイマ編

『ビザンツ宮廷文化——八二九～一二〇四年——』

根津由喜夫

コンスタンティノープルの都に君臨するビザンツ皇帝と、彼を取り巻く世界は、これまで、西欧人の視点から、とかく胡散臭げなイメージで描き出されてきた。虚飾に包まれ、陰謀の渦巻く宮廷、仰々しいばかりで非効率的な官僚機構、教会や宮殿の中で練り広げられる退屈で空虚な儀礼や儀式の数々……。

だが、二十世紀も終末を迎えようとしている今日、そうしたビザンツ皇帝宮廷の周辺に形づくられた豊饒な表象とシンボリズムの世界は、改めて多くの人々の注目を集めつつある。本書は、このようなビザンツ宮廷生活の全体像を提示すべく、一九九四年四月にアメリカのダンバートン・オークス研究所で開催された国際シンポジウムでの成果を集めた論文集である。以下に見るように、全体は六つの主題に分けられ、それぞれに二ないし三の論文が配される、という構成になっている。ここでは、便宜上、各論文に

番号を付し、原題を括弧内に表記しておくことにしよう。

I 皇帝の空間

- ① G・P・マジュスカ「自らの教会のなかの皇帝——聖ソフィア教会における皇帝儀礼——」(G.P. Maieska, "The Emperor in His Church: Imperial Ritual in the Church of St. Sophia")

- ② A・R・リトルウッド「宮殿の庭園」(A.R. Littlewood, "Gardens of the Palaces")

II 皇帝の装束と崇拜用事物

- ③ E・ブルツ「中期ビザンツ時代の宮廷装束」(E. Pilz, "Middle Byzantine Court Costume")

- ④ I・カラヴレスウ「帝国にわたっての「救いの手」——皇帝儀礼とビザンツ宮廷における聖遺物崇拜——」(I. Karavrezou, "Helping Hands for the Empire: Imperial Ceremonies and the Cult of Relics at the Byzantine Court")

- ⑤ A・ウエイル・カー「中期ビザンツ時代コンスタンティノープルの宮廷文化と崇敬用イコン」(A. Weyl Carr, "Court Culture and Cult Icons in Middle Byzantine Constantinople")

III 外国宮廷との交流

- ⑥ W・トロンツォ「ホルマン・シチリア王国の視点から見たビザンツ宮廷文化——パレルモのパラティナ礼拝堂の事例——」(W. Tronzo, "Byzantine Court Culture from the Point of View of Norman Sicily: The Case of the Cappella Palatina in Palermo")

- ⑦ O・グラバル「共有される事物文化」(O. Grabar, "The Shared Culture of Objects")
- IV 宮廷知識人と修辭学
- ⑧ G・T・ゼニス「皇帝賛美演説——修辭と現実——」(G. T. Dennis, "Imperial Panegyric: Rhetoric and Reality")
- ⑨ P・マツダリーノ「ビザンツ宮廷人を求めて——レオン・コイロスファクタテスとコンスタンティノス・マナッセス——」(P. Magdalino, "In Search of the Byzantine Courtier: Leo Choirophaktes and Constantine Manasses")
- V ビザンツ宮廷の社会構成
- ⑩ A・P・カジュダン・M・マローミック「ビザンツ宮廷の社会的圏域」(A. P. Kazhdan & M. McCormick, "The Social World of the Byzantine Court")
- ⑪ N・イロン・マキス「ビザンツ宮廷の官位と収入」(N. Oikonomides, "Titles and Income at the Byzantine Court")
- VI ビザンツ宮廷の芸術
- ⑫ J・トリリング「ダイタロスとナイティンゲール——ビザンツ宮廷神話における芸術と科学技術——」(J. Trilling, "Daedalus and the Nightingale: Art and Technology in the Myth of the Byzantine Court")
- ⑬ C・ジョリヴェー・レーヴ「コンスタンティノーブルの聖ソフィアとアクタマルの聖十字架教会における君主の臨在と表象」(C. Jolivet-Lévy, "Présence et figures du souverain à Sainte-Sophie de Constantinople et à l'église de la Sainte-Croix d'Aghamar")
- ⑭ H・ブグアイア「天上の宮廷」(H. Maguire, "The Heavenly Court")

次に各論文の内容をごく簡単に紹介し、適宜、評者の気付いた点などを申し添えることにしたい。

①のマジェスカ論文は、有名な「皇帝教皇主義」をめぐる議論を踏まえ、聖ソフィア聖堂で挙行された儀式のなかで皇帝が演じた役割を分析することで、その「祭司」としての側面を照射しようとするものである。彼の所説によれば、典礼の際、皇帝は、聖体拝領の仕方などで聖職者に準じる待遇を受ける反面、儀式中の彼の通常の居場所とは他の廷臣たちと同様、身廊部である点など、常に「聖職者」と「教会の世俗的守護者」の間を揺れ動く両義的な存在に留まった、という。ここから、「皇帝は、おそらく祭司かつ王ではあったが、祭司王ではなかった」(十一頁)という結論が導きだされる。皇帝は、一般の俗人とは異なるある種の聖性を帯びたが、「皇帝教皇主義」の名の下に連想されるような強力なカリスマの持ち主ではなかったのである。「天上」と「地上」、二つの世界を繋ぐ位置に立つ皇帝の象徴的機能については、本書の末尾のマガアア論文⑭をはじめ、この後も繰り返し論及されることになる。

次いで、②のリトルウッド論文は、表題のごとく、皇帝宮殿に付随する庭園を主題としている。その叙述はまさしく博覧強記、そこで扱われる話題も、古代オリエントからアケメネス朝・ササン朝・ヘルシア、イスラム世界の庭園、さらに古典古代、ローマ元老院議員のヴィッラや帝政期の皇帝たちの離宮にいたるまでの支

配者の庭園の歴史に及ぶのは序の口で、本題のビザンツ皇帝の庭園についても、首都の大宮殿、郊外の離宮、帝國教会施設の庭園が順次、検討された後、庭園に植えられた樹木や草花の種類、水路、噴水、池などの庭園の構成要素に及び、さらには人工的な自然の創造という脈絡で、宮殿内の自然をモチーフとした壁面裝飾や機械仕掛けの小鳥や樹木に話は転じ、最後に狩猟用庭園と動物園に触れて締め括られている。ここで提示される膨大な情報量には圧倒されるが、豊富な情報を嬉々として並べ立てるばかりで、そこからビザンツの宮殿付属庭園について統一したイメージを紡ぎ出そうとする姿勢が見られないのはただでない。ここで読者が味わう気分は、練達の添乗員にあちこちの名所旧跡をわけもわからぬままに連れ回され、突然、見知らぬ街角で置き去りにされたツアー客のそのようだと、言えは、言いすぎになるだろうか。

E・ピルツの論文③は、コンスタンティノス七世の「儀式の書」に拠りつつ、皇帝と高官たちが様々な祭礼や儀式の用に着用した衣装の様式や色、装身具その他の小物類などを類別して整理しており、それ自体、便利なマニュアルになっている。ただ、彼女が掲げた「祭礼の多様性と、皇帝の宴席との席次上の近さに応じて、独自のリズムと論理をもって変化する装束について、そのリズムを体系化し、論理を解説する」(三九頁)という課題が、充分に達成されているかと言えは、かなり疑問と言わざるをえない。

これに対し、聖遺物の帯びたシンボリズムが、皇帝の地位を正当化し、その権力を宣揚する武器として、いかに活用されたのか、を問うカラヴレズウの論文④は、本論集のなかでも最も刺激的な

論考のひとつである。ここでは、最初の殉教者、聖ステパノ(ステファノス)と洗礼者ヨハネの、いずれも右手の聖遺物が考察の対象になっている。

五世紀前半、テオドシウス二世の姉ブルケリアによって聖地から招来されたステパノの腕の聖遺物を安置するために、大宮殿のアウグステウスという名の広間に隣接して、聖ステファノス教会が建立された。アウグステウスでは古来、皇妃らの戴冠の儀式が行なわれ、聖ステファノス教会は皇帝の婚礼の場になった。二つの儀式では、冠が重要な役回りを演じており、「花の冠」を意味する聖者の名前が、まさしく両者を結び付ける機能を果たしたのである。

二つの建物を繋ぐ、アウグステウス正面玄関の柱廊部は「黄金の手」と呼ばれていた。それをカラヴレズウは、神の祝福と加護を象徴する「神の手」の造形表現がここにあつたためと推定する。この表象は、テオドシウス朝の皇族女性の名を刻む貨幣に多用された、花輪を持つ手の意匠と重なり合い、花冠クラウンと手の連想から、ここでも聖ステパノの腕のイメージが浮上するのである。

この聖者の腕には、教会壁画では、吊り香炉が握られているのが通例だった。それは、典礼で吊り香炉を振る皇帝の姿と共鳴し合い、かくして、使徒によって叙任された最初の輔祭と同一化した皇帝は、「使徒に等しき者」としてのイメージを振り撒くことになる。このように、断片的な表象が次々とシンボリズムの連鎖を呼び、華麗なイメージの連鎖を生み出していく語り口は見事である。

これに比べると、十世紀に招来された洗礼者ヨハネの右腕に関

する議論は、ずつとシンプルである。聖ヨハネによるキリスト受洗図とキリストによる皇帝戴冠の図像の構図の類似性が指摘され、そこから、聖ヨハネ→キリスト→皇帝、と神の恩寵が伝達されたことが暗示される。洗礼図のキリストに似て、身を屈めて冠を受ける皇帝のポーズは、「キリストに等しき者」として、地上の支配権を神から委ねられた彼の地位を象徴していた。ここにおいて、皇帝は、そのイメージのなかで同一化すべき対象を、使徒からキリストへと格上げさせているのが確認されるのである。

聖者の右腕、という共通する主題を比較検討しながら、五世紀と十世紀の皇帝像の違いを浮かび上がらせる手法は、鮮やかで、知的興奮を呼ぶ。

聖遺物の次は、イコンである。ウエイル・カーの論文⑤は、国家・王朝の命運と密接に結び付いたイコンが中期ビザンツに存在したか、と問う。ここでは、大宮殿に近いホデゴン修道院に安置され、宮廷と深い結び付きを有していた通称ホデゲトリアの聖母のイコンが、それ以前から皇帝の軍事儀礼と結合して崇敬を集めていたブラケルニティッサのイコンを凌駕して、帝都の守護者としての権能を強めていく過程が論じられる。

⑥のトロンツォ論文は、従来、ビザンツの亜流、というあまり有り難くないレットテル付きで語られがちなノルマン・シチリア王国の宮廷文化の再評価を試みたもの。ここでは、ルッジエーロ二世王によってパレルモの王宮内に建立された、パラティナ礼拝堂のオリジナルな内部装飾を読み解くことで、そこに込められた王の政治的メッセージを解説しようとしている。彼の考察によれば、ビザンツ教会建築の規範に反し、聖域の北側、キリスト伝の壁画

群に割り込むように設置された王のバルコニーは、無知に由来する逸脱ではなく、画像のキリストと生身の王とを対置させ、王がキリストに似て、神により地上に下された支配者であることを強くアピールするための仕掛けであった。一方、当初はキリスト教的な装飾が一切施されず、イスラム風の意匠で覆われた身廊部は、世俗の支配者としての王の地位を象徴する空間になっており、ここに見られる二つの様式の鋭いコントラストは、王がもつ二つの属性を象徴するのだという。美術史に疎い評者の素朴な疑問だが、本来、聖なる空間であるべき礼拝堂内に、どうして世俗的な雰囲気や狂溢するイスラム装飾を王は導入したのか、その真意が、いまひとつ推し量れない。

グラバールの論文⑦は、ビザンツ・イスラム両宮廷の間で外交上の贈物としてやりとりされた豪華な工芸品や高級織物に注目し、そこには従来、言われてきた「東方」の影響を見るより、両宮廷の双方向的な交流を認めるべきことを主張している。ただ、二つの宮廷の間で、信仰の違いにもかかわらず、同種の器物が愛好されたのは、宮廷における行動形態や習俗が共通していたからだ、という結論には、いささか飛躍があろう。

ビザンツの歴史を通じて、帝国の公的プロパガンダ装置として機能してきた皇帝賛辞演説は、反面、いたずらに美辞麗句を連ねるばかりで、皇帝への露骨な追従に終始する空虚な作品と現代の研究者にはみなされ、等閑視されがちだった。こうした皇帝賛辞文の史料としての再評価を図っているのが、デニス論文⑧である。これらの修辭作品は、主題となる出来事の直後に執筆、発表されたため、聴衆もその出来事の直接の目撃者であり、それゆえ

事件の内容に大きな改竄を加えることは困難だったことを彼は指摘し、それが歴史叙述に劣らぬ史料価値を有したことを説いている。彼の提言に異論はないが、際限もない賛美と追従のなかに、宣揚すべき皇帝像の変遷を読み取る、といった修辭作品ならではのアプローチ方法も、合わせて試みられる価値があるだろう。

マグダリーノの論文⑨は、宮廷に関わる人物の著作を分析し、そこから宮廷のもつ心性やイデオロギーを解き明かす、という手法をとる。彼が取り上げるのは、十世紀初頭のレオン・コイロスファクテスと十二世紀のコンスタンティノス・マナッセスである。マグダリーノは、この兩人が、教会の危険視した占星術に好意的だった点、皇帝宮殿内の建築や美術作品を讃える修辭作品 *epitaphs* を著している点など、共通する特徴を有していたことを指摘する一方で、コイロスファクテスが皇帝の建築事業を創造主たる神の業と対比させ、皇帝の絶対権力を讃えているのに対し、マナッセスの場合、皇帝権に対する個人の自立性が相対的に高まった十二世紀の時代相を背景として、同様の作品で、作業に携わった職人の腕前を賛美することに力点が置かれているのに注目し、兩者の相違点を鮮やかに浮かび上がらせることにも成功している。ただし、「ビザンツ宮廷人を求めて」という主題を掲げた上で、「典型的なビザンツ宮廷人とは、エクフラセイスを書く占星術師である」(一六四頁)という結論は、「結論が先にありき」という印象が拭いがたい。マグダリーノが何をもって「典型」と言うのか、いまひとつ判然としないが、それが「平均的」を意味しないのは明らかだろう。

これまで正面から論じられることのなかったビザンツ宮廷社会

の包括的検討を目指す論文⑩は、九七年五月に惜しくも急逝した A・P・カジュダンと、M・マコーミックの共編である。さしもの碩学二人をもってしても、限られた紙幅でこの大きな課題に立ち向かうには無理があり、この主題に関連する幾つかのトピックごとに簡単な素描が示される、という体裁をとる以上、個々の議論に深く掘り下げた考察を望むべきではあるまい。そうしたなかでも、門地がない若者が宮廷社会で栄達していく形態を検討するなかで、有力な廷臣の家産組織を經由して宮廷入りを果たすパターンが十世紀に多く見られる、という指摘は、この時代が、ともすると機能的な官僚機構のイメージで語られることが多かっただけに、新鮮に感じられた。また、十世紀に宮廷内の席次や各種の整然とした儀式が重んじられたのは、思いのほかその地位が不安定だった支配層の構成員たちの安定と秩序を望む気持ちの反映だった、という所説は、おそらく論証は困難だろうが、魅力的な仮説である。

N・イコノミデスの論文⑪は、皇帝宮廷の成員が得る収入の性質、獲得方法が九一十世紀のマケドニア朝と十二世紀のコムネノス朝の時代では、十一世紀の危機を経て一変したことを指摘し、それをマネタリズムの理論で説明しようとする意欲作である。彼によれば、マケドニア朝の時代は、貨幣流通を国家が管理する「統制経済」の時代であった。国家は租税として集積した大量の金を、官職・爵位保有者や軍隊に俸給、年金として分配することで、貨幣流通のポンプ役を果たしていたのである。こうしたシステムは、大量の現金を集積し、それを比較的長期の間、寝かせておけるような状況、つまり貨幣需要にゆとりのある場合のみ、

うまく機能した、という。

ところが十一世紀になると、人口増と経済発展が相俟って、貨幣需要が急激に増大し、従来のシステムは危機に瀕した。帝國政府がこの時期に大々的に導入した徴税請負制や元老院のおそらく有償での開放も、こうした危機に対処するための施策として理解されている。結局、一連のシステムの危機は、コムネノス朝の下、国家高官や軍隊への現金支給の度合いを下げ、それに代わって土地や徴税権を分与するシステムが導入された時によりやく收拾に向かった。この結果、国家は金を集めては分配するポンプ役を降り、貨幣のかなりの部分が、国家の徴税組織を介することなく、直接、納税者から軍人や官職保有者などの受益者の手に渡ったから、貨幣流通の効率は向上することになった。貨幣論の視座からマケドニア朝とコムネノス朝の国家機構の性格の相違を浮かび上がらせる手並みは見事と言えよう。

⑫のトリリングの論文は、ビザンツ宮廷の芸術と科学技術の相互関係を論じている。その思わせぶりなタイトルは、宝石で飾られた機械仕掛けの小鳥よりも、本物のナイティンゲールの歌声の方が美しく、尊いことを説くアンデルセンの寓話と、ギリシア神話の名高い名匠の名に由来する。

彼は、コンスタンティノープルの宮廷にあった囀る小鳥をのせた黄金の木などの自動機械を、単なる子供だまし、芸術の退廃した姿とする見方を退ける。彼によれば、それはビザンツ人独特のやり方で自然を再現、再創造する行為であり、しかも、こうした自動機械は来客を驚かせるよりも、むしろ皇帝が軍事的にも応用できる高度な科学技術をもつことを見せつけることが真の目的に

なっていたのだ、という。これまで、東方風の悪趣味なこけおどし、といった冷やかな評価が散見されたこの種の自動機械に、皇帝の現実主義に裏打ちされた深慮が込められていた、という彼の所説は斬新である。ただ、意地の悪い言い方をすれば、リウトブランドの記述などを見るかぎり、観る側が皇帝の真意を充分に理解してそれらを見物していたようには思えないのだが。

唯一の仏語論文⑬は、ほぼ同時代（九世紀末―十世紀初頭）の二つの造形作品、すなわちコンスタンティノープル、聖ソフィア聖堂の南北トリビューン天井部と、小アジアのヴァン湖南東、アクタマル島の聖十字架教会を対象に、それぞれに君主が込めた政治的メッセージを読み解くことを目指している。

皇帝の私的礼拝に用いられた聖ソフィアの南側トリビューンの天井には、かつてパントクラトールのキリスト像と聖霊降臨図が描かれていたことが、十八―十九世紀の素描から知られている。ジョリヴェーレヴィによれば、天使に囲まれたパントクラトール像の下に、廷臣に囲まれた生身の皇帝が席を占めるのは、天上の宮廷と地上のそれとの関係を可視的に表現するものであり、聖霊降臨図も、使徒の任務を継承し、選ばれた民を正しい信仰に導き、異教徒を打ち払う皇帝の使命を宣揚するものであった、という。

次いで考察は、アクタマル島の聖十字架教会の有名な外壁レリーフ装飾や内部の壁画の分析に移る。ここでも、一連の図像は、同教会を建立したアルメニア系ヴァスプラカン王国のガギク一世の王権宣揚を目的に描かれた、という前提の下に解説が進められる。教会の外壁を巡る葡萄唐草模様のなかに様々な動物や田園生活の諸相が配された意匠は、国土の豊穡と王がもたらした平和と

繁栄を象徴しており、聖堂の内外に繰り返し現われるアダム像は、楽園で神の代理者として被造物の上に君臨するアダムと、地上の王国を統べる王の姿を重ね合わせ、後者の地位の正統化を図るものであった。さらに、ヨナの戒めに耳を傾けるニネヴェ王や旧約の族長や王など、聖堂外壁のレリーフのひとつひとつが理想の王権のイデーを宿しているのだという。

アタダマル教会の複雑な壁面装飾を、王権宣揚という視角からクリアに切り取ってみせる手捌きは鮮やかであり、数年前に現地を訪れ、外壁レリーフの謎めいた魅力に圧倒された経験をもつ評者には、個人的にも、大変興味深かった。ただ、あえて難を言えば、コンスタンティノープルとアタダマルの二つの主題が実質的に別個の考察になっており、両者を比較、検討する姿勢が見られない点が残念である。イスラム勢力と国境を接し、厳しい軍事的対立と緊密な文化的交流を体験していたアルメニア系王国の王権のイデオロギー、その宣揚の技法が、ビザンツのそれと比べて、いかなる相違、特質をもったかがビザンツとの比較のなかで、もっと鮮明になるような工夫があったならば、論文としての完成度もさらに高まったのではないだろうか。

ビザンツ人が、皇帝の宮廷を天上の宮廷の似姿としてイメージしていたことは、本論文集でも繰り返し論じられたところである。論集の掉尾を飾るマグアエアの論文⑭は、皇帝の装束を着た大天使と、十三世紀以降、翼をつけて表現される皇帝の画像を手がかりに、これら二つの宮廷の相互関係を説明することを課題にしている。彼の主張のポイントは、二つの宮廷は互いに没交渉ではなく、一方の成員が他方へと往き来できた、という点にある。「天

上の宮廷」の画像では、中央に座すキリスト、ないし聖母、の両脇に控える大天使と皇帝は同一の装束を身にまとっていた。ここでは、皇帝の衣装は、神の特別な恩寵を享受する者であることを示す記号として機能していたのだという。一般の聖者も天上では皇帝の装束を着用していた、と想定されているのがその証拠である。天使と皇帝をオーバーラップさせる風潮の延長線上に、十三世紀以降の有翼の皇帝像の出現が位置付けられる。一方、「地上の宮廷」では、中央に立つ皇帝は、「天上」におけるキリストの位置を占め、脇に立つ宮廷宦官や將軍の衣装を着けた大天使の補佐と奉仕を受ける立場にあった。「天上」では天使と同格であり、「地上」では天使の助力を得た皇帝の地位は、かくして神の加護の下に置かれ、一般臣民とは隔絶された超越的な権威を帯びることになったのである。

最後に、本書全体を振り返って、二、三、気付いた点を書き添えておこう。

まず第一は、「宮廷文化」という用語の問題である。基本的用語の定義を冒頭で行なっている論文⑩、西欧社会を念頭に作られた「宮廷文化」という概念をビザンツに適用することが容易でないことを指摘する⑨、何をもって「宮廷芸術」というべきか自問する⑫を別にすれば、他の大半の論文は、この用語を厳密に定義付けることなく、ごくルーズに用いているように見える。それがひいては、個々の論文の主題設定の際に全体の統一性に必ずしも十分な配慮がなされなかったような印象を与え、全体としてはやや散漫な読後感を生む結果にもなっているのかもしれない。こう

した用語法の曖昧さは、論文集における基本的コンセプトの統一性を重視する我が国の研究者には、気になる点かもしれない。だが、その一方で、この種の国際的共同研究において、事前に報告者間の緻密な意見調整を行なうのが技術的に困難なことも斟酌せざるを得まい。

第二に指摘したいのは、本書全体を通過すれば誰でも気付くことであろうが、ヴィジュアルな資料を積極的に活用しようという姿勢が顕著な点である。図版を掲載した論文は八篇を数え、過半数を越える。これは、執筆メンバーのなかで美術史家が優位を占めた、というより、造形作品から「歴史」を読む方法論がビザンツ史でも必須になりつつあることを示すもの、と受けとめたい。もちろん、その際には、現存する造形作品が宗教的なそれには有限定されていることを認識し、今日では失われた大量の世俗的作品にも思いを及ぼすことが必要になる。その点で、現存しない作品について文献上の知見を収集する、C・マンユやP・マグダリーノの仕事が注目されるのである。

最後に本書を読み終えて感じるのは、多彩な論文を集めた本書をもってしても、ビザンツ宮廷文化の全容を捉えるにはいたっていないという思いである。とりわけ、宮廷の通常の所在地である皇帝宮殿とそれを包摂する首都コンスタンティノープルの相互関係を究明する本格的な論考が待望される。近年、コンスタンティノープルをめぐる議論は、再び盛況を見せているように思われるが、そうした成果も合わせて、近い将来にこの方面で、さらに大きな収穫があることを期待したい。^④

書 ① C. Mango, *The Art of the Byzantine Empire 312-1453*, Englewood

Cliffe, N.J., 1972. (rep. Toronto, 1986); P. Magdalino & R. Nelson, "The Emperor in Byzantine Art of the Twelfth Century", *Byzantinische Forschungen*, 8, 1982, pp. 123-183.

② ①く概略的に註以下を参照。H. Hunger, "Konstantinopel und Kaisertum als "Neue Mitte" des Ostromischen Reiches" in *Reich der Neue Mitte. Der christliche Geist der byzantinischen Kultur*, Graz/Wien-Köln, 1965, S. 37-107; Id., "Der Kaiserpalast zu Konstantinopel. Seine Funktion in der byzantinischen Außen- und Innenpolitik", *Jahrbuch der österreichischen Byzantinistik*, 36, 1986, S. 1-11; J. Herrin, "Byzance: le palais et la ville", *Byzantion*, 61, 1991, pp. 213-230.

③ cf. C. Mango & G. Dagron ed., *Constantinople and its Hinterland*, Aldershot, 1995; A. Ducellier et M. Balard éd., *Constantinople 1054-1261. Tête de la chrétienté, proie des Latins, capitale gréque*, Paris, 1996; P. Magdalino, *Constantinople médiévale. Etudes sur l'évolution des structures urbaines*, Paris, 1996. 既発表論文を集めたC. Mango, *Studies on Constantinople*, Aldershot, 1993. 邦語では、井上浩一「都市コンスタンティノープル」岩波講座世界歴史第七巻「一九九八年」一〇九—一三〇頁も参照。

④ なお、本論文集に参加していない独語圏の研究者による共同研究として、R. Lauer und H.G. Majer Hrg., *Hofische Kultur in Südosteuropa*, Göttingen, 1984 が、P. Schreiner, "Charakteristische Aspect der byzantinischen Hofkultur. Der Kaiserhof in Konstantinopel", S. 11-24; M. Restle, "Höfisch-höfische Kunst Konstantinopels in der mittelbyzantinischen Zeit", S. 25-41. に加えて、アメリカの論集では触れられていないビザンツ後期の地方政権を論じる論文「譯」P. Schreiner, "Neue höfische Zentren im byzantinischen

Reich. Die Kultur des trapezuntinischen Kaiserhofes und der Despotenhöfe" S. 42-55; L. Maksimović, "Der Despotenhof in Epirus im 14. und 15. Jahrhundert" S. 86-105, が収録されており、有用である。

(B5版 二六四+x頁 一九七七年 Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington D.C.)
(富山大学人文学部助教授)